

2021年
11月4日
木曜日

イエスが生前交わりを持った人たちの中には、当時のユダヤ社会で神様の救いから最も遠いとレッテルを張られた「罪人」「徴税人」という人々もいたと『聖書』（マルコによる福音書）2章13―17節などに記されている。当時のユダヤ社会で、定められた律法を守ら（守れ）ないため「罪人」とされた人々や、支配国であった古代ローマ帝国のために同胞から税金を徴収し私腹を肥やしているとのことで「罪人」と同様の扱いを受けていた「徴税人」と食事を共にすることはタブー視されていた。こうした人々には、それぞれユダヤ教の教えに「反した」行いをしていくという「事実」に基づいた判断が下されており、その「事実」とその「結果」を他の人々が共有すること、同様の「過ち」を犯す人が出ることへの抑止効果の意味もあったと思われる。

舟木 讓 教授（宗教哲学・キリスト教学）

「事実」の背後にある「真実」に気づく優しさを

しかし、そうした「事実」に至るまでに当事者が辿ってきた人生にまで思いを致し、正確に理解している者は多くはないと言える。例えば、「徴税人」という生き方を選択した人は、その結果「罪人」と同様の扱いを受け、社会からはじき出されることになったはずである。その決断に至った歩みや経験に親身になって寄り添うことは容易でない。ただ、当人がそれまで抱えてきた葛藤、悩み、苦しみなどに真摯に向き合うとき、表面的な「事実」の背後にある「真実」（そうした職業が必要とされているにもかかわらず、その実態を正確に把握し、被差別的な扱いを受けないように整える社会制度の欠如など）の存在が自ずと明らかになってくる。

このことに私たちが気づくとき、表面的な「事実」によって人を断罪し、その人格を貶めるようなレッテルを張り、その背後にある「真実」を無視して集団から排除することがいかに傲慢で暴力的な行為であるかに思いが至るはずである。乱暴に切り取った「事実」には、いつの間にか主観、偏見などが加わり、その背後にある「真実」とは異なる尾ひれはひれがつき、やがてその全体があったかも「事実」であり「真実」であるかのように独り歩きしていくことは私たちの周りでも散見される事象である。そのことを誠実に受け止める時、社会を、より優しく、共感に満ちたものに変えるヒントが浮かび上がってくるのではないだろうか。

寧ろ交わってこられた。それぞれの人が紡いできた人生を他者が完全に理解することは難しい。しかし、あの人もこの人も私と同様、悩みや葛藤、様々な痛みも感じる存在であるということに思いを馳せ、皮相的な「事実」で人を拙速に判断し、理解したかのように錯覚することが引き起こす暴力的な結果へと想像力を働かせることが全ての人にとって必要な人生態度である。様々なところで多様性という豊かさが見え化してきている現代、「事実」の背後に複雑に存在する一人一人の「真実」に優しく寄り添うことが、真に優しい、共生社会創造への道であることをイエスの生き方から学び実践することが、今私たちに求められていると言える。